

# 若手アカデミーの動向

## シンポジウム 『融合を問う：学問の消滅と生成の系譜学から』 開催報告

瀬山倫子



2016年7月10日（日）、日本学術会議公開シンポジウム『融合を問う：学問の消滅と生成の系譜学から』が日本学術会議講堂にて開催された。本シンポジウムの企画は、主催する若手アカデミーの「若手による学問の未来検討分科会」メンバーが、昨今の国内外で展開されている学問の「融合」や「統合」に直面する中で、専門領域としての形や、制度上の立ち位置を失ってしまうものが出てくるのではないかと、また、それらは将来にわたって本当に失われてしまっているものだろうか、という疑問を起点に始まったものである。本シンポジウムは、同じく若手アカデミーの「若手科学者ネットワーク分科会」との共催であり、日本科学史学会と科学技術社会論学会より後援頂いた。

第一部は、4人の講師による各30分の講演で始まり、それに引き続き座談会という構成であった。最初は、藤原辰史氏（京都大学）の「融合する学問としての農業経済学」について講演頂いた。農学部内に設置される農業経済学は、農業という自然科学で解釈されるものを相手に、家族経営特有の人間の要素が関わる中で、経済を議論するという、最初から文理融合を運命付けられた学問であることが紹介された。学問としての成立は、明治初期から国力を高めるための道具としての農業の効率化を求めた国策によるものであり、歴史は長いものの、経済学部ではないといった理由から、学部・学科制度としてみると、不安定な立場にあるということである。しかしながら、今の世の中に目を向けてみれば、まさに「食ブーム」に沸き立っており、農業と地域振興、経済とが密接に関連する現場であり、農業経済学は新たな展開が期待される状況にあるということである。

二番目は、隠岐さや香氏（名古屋大学）から『社会数学』の生成、消滅と部分的再生」と題した講演であった。1785年頃に社会数学の概念を提案したコンドルセは、人間の判断を解析数学的に解釈しようと試みるが、当時の紙とペンの世界では複雑性が関わる人間を数式に落とすことは難しかったようである。批判を受け、長く省みられていなかったが、20世紀には社会的選択



シンポジウム会場の様子



第一部・座談会

理論の原点として再評価された。また、近年のビッグデータ解析や脳神経科学関連論文において、コンドルセが引用されることもあるという。

次に、中村征樹氏（大阪大学）から、「技術と学問の間：実学化と鈍化に揺れた革命期の学問」について講演いただいた。フランス革命期は合理性が追及され、体系化や解析学の導入を通じ技術分野の学問化が推進されていったが、革命後には理論への偏重により技術

の現場から乖離していると批判されることになったという。また、政府の中枢に科学系の人員が加わったこともその展開に大きな影響を与えたという。

最後の講演は、福永真弓氏（東京大学）の「融合の先にあるものとは何か：環境学の現在と百年の計」であった。環境学は分野として文理融合が運命付けられた学問という。それは取り扱う「問題」が、環境や気候変動や人工物といった科学的な要因だけでなく、国・地域の社会・文化・歴史といった人文的な要因が影響しているためという。環境学は「未来を語る学問」であり、問題解決も現場や人々に寄り添うことから始まるという点が印象に残る講演であった。

座談会では、四人の講師に生田ちさと氏（JAXA）と平田聡氏（京都大学）を加えた6名が登壇し、まずは登壇者が講演者に質問を投げかけあうスタイルで始まった。学問の融合の実際例や教育的視点などについて意見交換が行われ、後半には会場からの意見・質問にも回答した。

第二部は、シンポジウム付随ワークショップとして、「科研費の新体制は学術の場をどう変えるか」と題し、内閣府・知的財産推進事務局の前澤綾子参事官補佐から、科研費の改革の基本的な考え方を40分ほど解説頂き、その後の会場からの質疑にもご回答頂いた。内容としては、科研費規模と他の政策との関係、ピア・レビュー方式ならではの改革の視点、今後の改革の具体的な方向性、さらには、審査員自体の評価など、多岐に渡るものであった。

休日の開催であったが60名を超える参加があり、また会場から質問・コメントも多数頂き、本内容についての関心の高さをうかがい知ることができた。また開催にあたり、ご協力頂いた皆様には、本欄を通じて感謝を述べさせて頂きたい。シンポジウムの詳細については、後日、本誌にて特集の予定である。

●プロフィール

瀬山倫子（せやま みちこ）

日本学会会議連携会員、日本電信電話株式会社先端集積デバイス研究所主幹研究員

専門：電子材料、センサーデバイス